# 第　3　分　科　会

会場　ホテル金沢
４階　「エメラルドA」

分科会テーマ

## 「連携でつくる運動部活動」

研究発表

◆　池　田　　雄　幸　　高知県中学校体育連盟　理事長
高知市立城北中学校

「運動部活動の現状と課題」
～地域連携・地域移行の取組を通して～

◆　嶋　川　　広　好　　大分県中学校体育連盟　研究部員
豊後高田市立高田中学校

「ニーズに応じた地域移行に向けての取り組みについて」
～部活動統括コーディネーターと取り組む持続可能な部活動の地域移行～

紙上発表

◆　廣　瀬　　翔　平　　富山県中学校体育連盟　研究担当委員長
富山市立興南中学校

「教員が主体となって運営する地域クラブ活動について」

| | | | |
|---|---|---|---|
| 指導助言者 | (公財)日本中学校体育連盟 | 副　会　長 | 野口修司 |
| | 富山県中学校体育連盟 | 会　　長 | 櫻打佳浩 |
| 司会者 | 富山県中学校体育連盟 | 副　会　長 | 鍋田敬一 |
| 運営責任者 | 石川大会実行委員会 | 副　会　長 | 中田知邦 |
| 記録者 | 石川大会実行委員会 | 編集部員 | 堂坂英隆 |

# 運動部活動の現状と課題

～地域連携・地域移行の取組を通して～

高知県中学校体育連盟　理事長

高知市立城北中学校　池田　雄幸

＜提案趣旨＞

高知県の現状は、生徒数の減少によって団体競技でチームが組めないことや、指導者不足による活動機会の確保が困難な状況がある。特に、中山間地域では課題が山積しており、地域連携・地域移行の取組を早急に進めることで、子ども達の活動の機会を確保すると共に、教職員の働き方改革も進めていく必要があることから、県教育委員会と連携を図り、部活動を地域連携・地域移行するための環境の整備に取り組んだ。

## １　はじめに

高知県は、輝く太陽のもと、黒潮打ち寄せる変化に富んだ海岸線をはじめ、四万十川に代表される清流や緑深い山々など、美しく豊かな自然に恵まれています。あわせて、坂本龍馬や吉田茂など、数多くの先人・偉人を輩出してきた歴史と風土があります。

高知の自由で豪快な気風は、「いごっそう」や「はちきん」と呼ばれる、おおらかな中にも芯の通った県民性を育み、アイデア豊かな土佐人の知恵と行動力は、こだわりのある園芸作物や産業技術を生み出しました。また、「よさこい祭り」に代表される個性豊かな地域の文化を発展させてきました。

高知県の学校部活動は、スポーツ・文化芸術に興味・関心のある同好の生徒が自主的・自発的に参加し、各部活動の責任者の指導の下、学校教育の一環として行われ、教師の献身的な支えにより、我が国のスポーツ・文化芸術振興を担ってきました。

また、体力や技能の向上を図る目的以外にも、異年齢との交流の中で、生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築を図り、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感の涵養に資するなど、学校という環境における生徒の自主的で多様な学びの場として、教育的意義を有してきました。

しかし、少子化が進展する中、学校部活動を従前と同様の体制で運営することは難しくなってきており、学校や地域によっては存続が厳しい状況にあります。また、専門性や意思に関わらず教師が顧問を務めるこれまでの指導体制を継続することは、学校の働き方改革が進む中、より一層厳しくなることから、生徒の豊かなスポーツ・文化芸術活動を実現するためには、学校と地域との連携・協働により、学校部活動の在り方に関し速やかに改革に取り組み、生徒や保護者の負担に十分配慮しつつ、持続可能な活動環境を整備する必要があると考えています。

## ２　高知県の現状

（１）県教育委員会のアンケート結果（H24 と R4 の比較）

【生徒数】　　H24：16,151 人→R4：13,196 人（－2,955 人）※18％減

【部員数】　　H24：12,583 人→R4：　9,497 人（－3,086 人）加入率 58％

【部活動数】　H24：　　998 部→R4：　　962 部（－　　36 部）※4％減

【教員数】　　H24：　1,966 人→R4：　1,717 人（－　249 人）※13％減

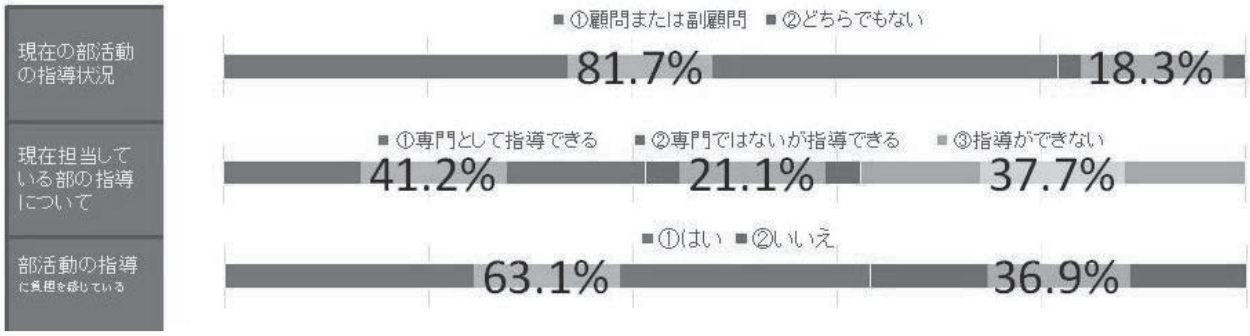
『部活動の指導に負担を感じている教員の割合』61.9％（R4.10 月）

〈課題〉

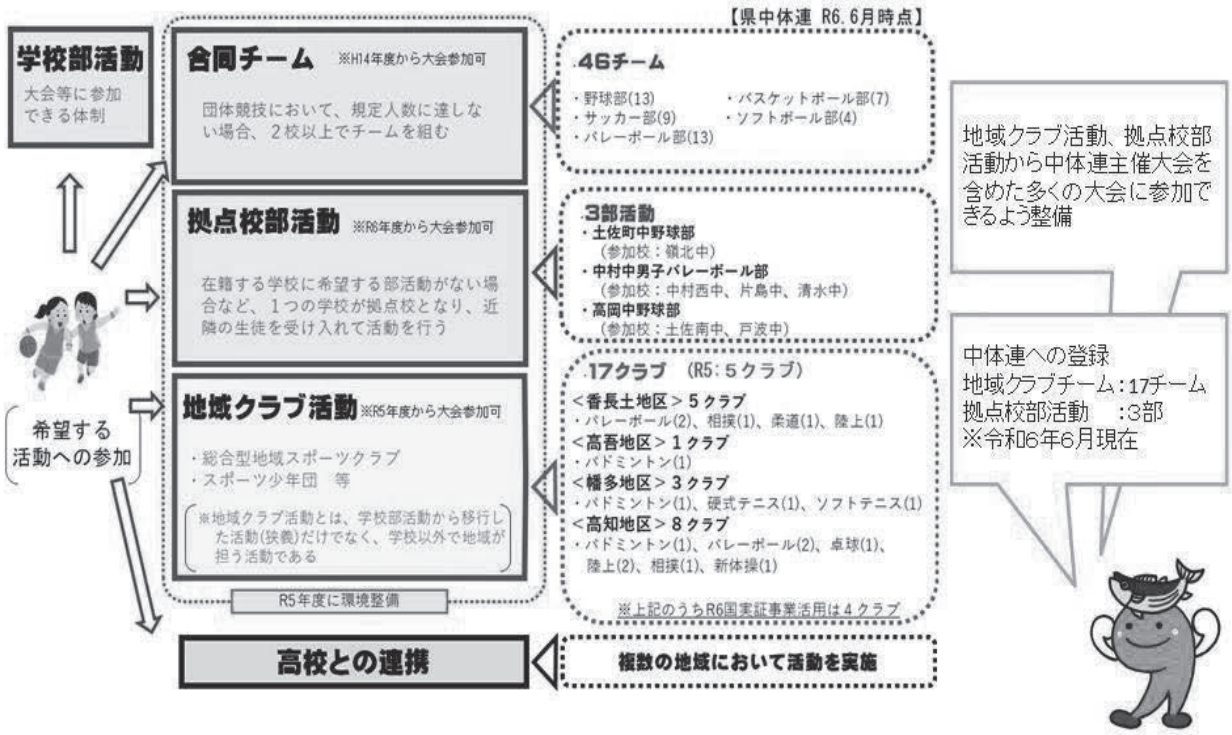
やりたい部活動がない、人数が少なくチームが組めない　等

『現在の担当部活動の指導』専門的な指導ができない 37.7％（R4.10 月）

※上記の数値は公立中学校のもの




（２）合同チーム・拠点校部活動・地域クラブ活動数（R6．６月現在）



３　地域連携・地域移行の取組

| 市町村 | 概要 | 取組内容 |
|---|---|---|
| 土佐町<br>本山町 | 市町村をまたいだ連携<br><br>〈拠点校部活動〉 | 嶺北中学校（本山町）に野球部がないため、近隣の土佐町中（土佐町）を拠点校として、野球部の拠点校チームで活動している。平日・週休日に合同で活動している。 |
| 土佐清水市 | 高校との連携<br><br>〈地域クラブチーム〉 | 硬式テニスを地域クラブチームとして活動している。昨年まで清水高校に硬式テニス部がなかったため、硬式テニスを続けたい生徒が市外に進学していた。清水高校と連携し、令和6年度に硬式テニス部を設置したことで、清水中学校硬式テニス部の生徒が清水高校に進学し、中学生・高校生が合同で活動している。 |
| 南国市 | 総合型地域スポーツ<br><br>クラブとの連携<br><br>〈地域クラブチーム〉 | 総合型地域スポーツクラブ「まほろばクラブ南国」と連携し、県内の各種大会にはクラブチームとして出場する。このほか市独自のアイデアとして、複数のスポーツを楽しめる「多種目体験型クラブ」も設け、運動部の新たな形を見いだそうとしている。 |
| 四万十市 | 新たな地域スポーツ<br><br>クラブとの連携<br><br>〈地域クラブチーム〉 | 四万十市における部活動改革の一つとして、ソフトテニス（男子・女子）が、4名の指導者とともに、市内・外から 26 名の選手たちが集い、本市で初めての地域スポーツクラブ（S（エス）×Crew（クルー））を結成した。 |
| 土佐市 | 先を見据えた取組<br><br>〈拠点校部活動〉 | 先にある学校の統廃合を見据えて、拠点校部活動で活動している。生徒の交流が深まるなど、統合に向けた効果も期待される。 |

地区の実情に合った取組が徐々に進んできている。県総合体育大会・四国総合体育大会・全国中学校体育大会が終わり、新チームへの移行などがあるため、今後中体連への申請の増加が想定される。

高知県 35 市町村の中には最も近い中学校と約 30km 離れている地域がある。

## ４　成果と課題

（１）成果

○　地域クラブ活動のチーム、拠点校部活動が中体連主催大会に出場できるように整備したことにより、子どもたちの活動機会の確保ができたことにより、各地域の実情に応じた取組が少しずつ進んできている。

○　地域の実情に応じて近隣の市町村と協力し、市町村をまたいだ取組が行われている。

○　部員数不足により団体戦を組むことができなかった生徒が団体戦に出場できる環境を整備したことで、団体戦への出場チームが増えることや大会の活性化が見込める。

○　専門性のある指導を受けることで競技力や意欲の向上につながる。また、小学校から引き続き活動することで一貫した指導体制が構築できる。

（２）課題

●　学校間の距離が遠く（特に中山間地域）合同で練習することが困難な地域が多い。これにより、平日の活動を各学校で行い、休日のみ合同で活動しているチームが多くある。

●　地域移行や拠点校部活動を選択した場合の生徒数（部員数）不足の課題がある。これにより、地域クラブと学校部活動（拠点校含む）の合同チームが認められていないことから、地域移行への取組に踏み出せないことがある。

●　地域クラブ活動の申請時期や提出先など手続き上のルール等が明確に伝わるよう、地区中体連事務局や各競技の専門部長等と連携し、伝達方法を確立していく必要がある。

●　持続可能な形で地域クラブ活動を存続していくためにも、多様なニーズに対応できるよう指導者の確保や育成をしていく必要がある。

●　指導者への謝金や・旅費等の予算など、受益者に係る経費の検討も必要である。

## ５　まとめ

高知県中体連では、前に記述しているとおり、高知県（各地区）の実情に合った部活動改革の取組が行えるように、県中体連主催大会への参加制度及び県中体連への登録・申請について緩和してきた。このことにより、各市町村では、徐々に地域の実情に合った取組が進んできている。しかしながら、近隣の学校との距離が遠い学校、特に中山間地域では日々の活動が困難なことから部活動改革に踏み出せないところがある。また、今後の生徒（部員）数の減少が明らかとなっており、高知県の子どもたちの活動機会の確保やスポーツの発展については、今後、大きく改革していかなければならない。このことは、県中体連だけでは解決できない課題であり、県教育委員会や各市町村の行政、教育委員会、学校、地域住民等の理解と協力が必要なことである。県中体連としても、高知県の子どもたちが運動に親しむ事ができる環境を整備するため、各機関と連携を図り、子どもたちのスポーツ活動の最適化に向け部活動の改革にも組織として取り組んでいけるよう努めたい。

# ニーズに応じた地域移行に向けての取り組みについて

～　部活動統括コーディネーターと取り組む持続可能な部活動の地域移行　～

大分県中学校体育連盟　研究部員

豊後高田市立高田中学校　嶋川　広好

＜提案趣旨＞

大分県では、令和５年度より大分県中学校体育連盟主催大会において、部活動の地域移行に伴う行政が関係する地域クラブ活動の参加を承認した。

これを受け、今回ご紹介する豊後高田市をはじめとする県内３市において、市教育委員会に地域クラブ活動のコーディネーターを配置し、中体連・学校・地域とのパイプ役となり、連携を図りながら部活動の地域移行を模索中である。コーディネーターの役割や取組、課題を紹介することで、持続可能な運動部活動と中体連主催大会の運営について今後のより良い方向性を検討する。

## １　はじめに

### （１）大分県と大分県中体連の状況

大分県中学校体育連盟では、県内 16 郡市の各郡市中学校体育連盟を以て組織し、令和６年度現在、県内 117 校の中学校が加盟している。また、17 競技（19 種目）の競技専門部を置き、各郡市総体予選を勝ち上がったチームによって、県中学校総合体育大会を開催している。秋には、県新人大会を各競技団体と共催で 17 競技（18 種目）を実施している。

本県の運動部活動設置数は令和元年度の 1,443 部から令和４年度の 1,391 部と減少傾向が続いている。その一方で、複数合同チームは、令和元年度の 19 チームから今年度 34 チームと増加して、単独校では部活動の存続が難しい現状となってきている。

そのような中、（公財）日本中体連では地域クラブ活動の参加を認める方針を示した。このことを受け、大分県では行政が関係するスポーツ団体等を地域クラブ活動、それ以外をスポーツ団体等とし、令和５年度は地域クラブ活動のみが参加、令和６年度より地域スポーツ団体等も参加できるよう規定を緩和したところである。

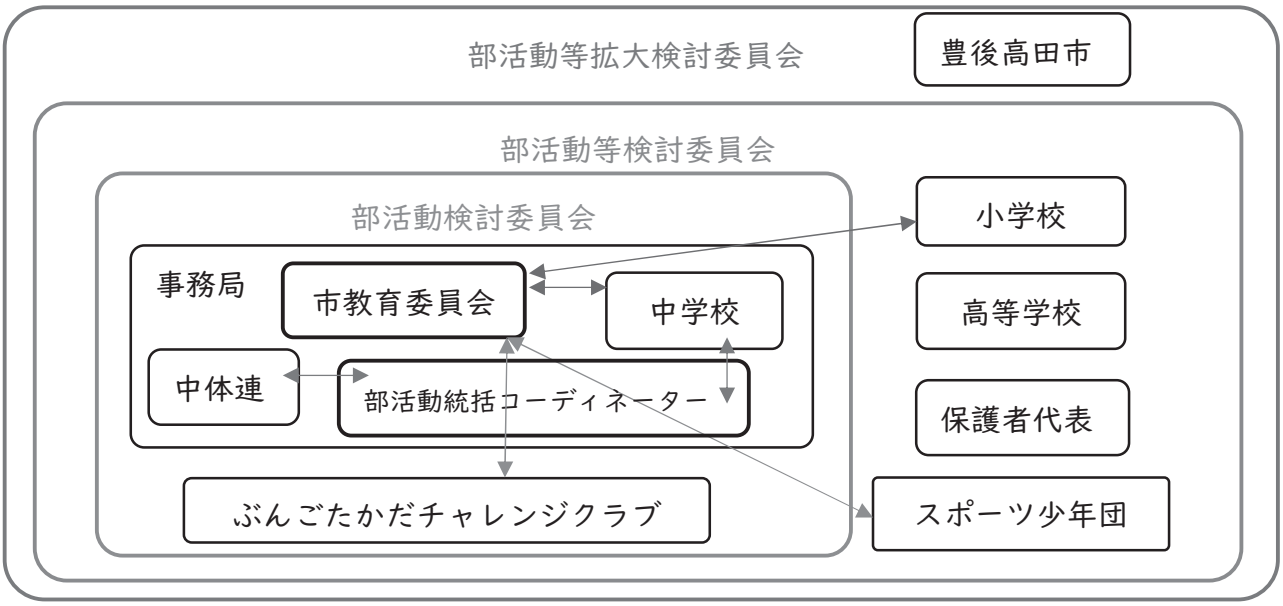
### （２）豊後高田市の取り組み

豊後高田市は人口約 2.2 万人、市内６校総生徒数４７５人である。本市は国の方向性と市のリソースを踏まえ、一人一人のニーズに応じたスポーツ・文化芸術環境を整えるため、「できること」「できるところ」から長期的視野で計画的に条件整備を進めている。令和７年度末までに条件整備を整え、令和８年度から中学校部活動の「休日指導」の完全移行を実施し、中学校部活動の「平日指導」の移行、高校やスポーツ少年団の地域移行を経て、将来的には、全ての部活動を地域の「地域総合型スポーツクラブ」に移行していくことを計画している。

令和５年度までの取り組みは①地域移行のための方針、ガイドラインを策定し、部活動検討委員会を立ち上げ、会議の実施　②部活動に関係する団体の種類、指導者、参加者等の現状把握　③持続可能な部活動等の地域移行の進め方の整理　④指導者の確保に向けた「中学校部活動の地域指導者に関する要綱」の作成、指導者の募集・登録・更新、説明会の実施　⑤地域移行を周知するチラシの配布　⑥保護者・児童生徒・教職員へのアンケート調査等を行ってきている。

## ２　部活動検討委員会

（１）組織




（図１　組織図）

・部活動検討委員会

（市教育委員会・地域総合型スポーツクラブ・中学校・中体連）

・部活動等検討委員会

（市教育委員会・地域総合型スポーツクラブ・中学校・小学校・高等学校・保護者代表・中体連）

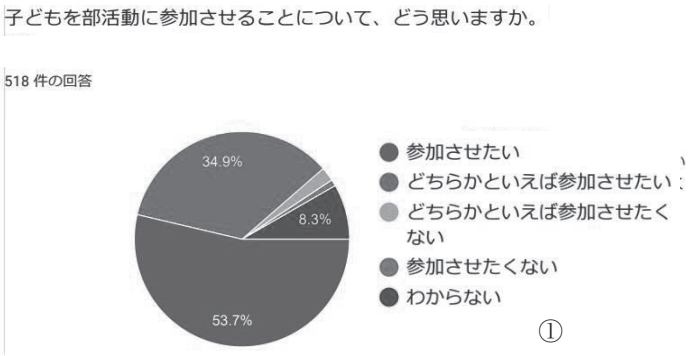
・部活動等拡大検討委員会

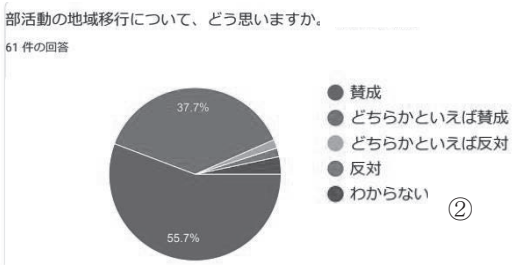
（市・市教育委員会・地域総合型スポーツクラブ・中学校・小学校・高等学校・保護者代表・中体連）

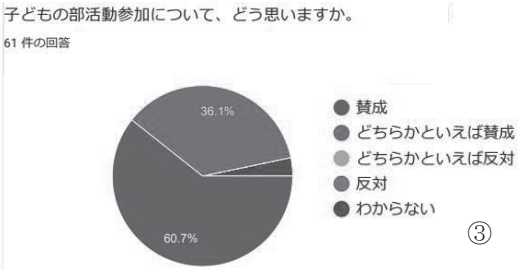
※地域総合型スポーツクラブ「ぶんごたかだチャレンジクラブ」

（２）市内アンケートの結果

令和４年１２月に市内の小学校第５・６年生の児童、中学校第１・２年の生徒、中学校教職員、小学校教職員、幼稚園年長園児から中学校第２学年までの保護者を対象に部活動の地域移行に関するアンケート調査を実施した。翌令和５年２月にアンケート結果を考察し、部活動の地域移行に関するＱ＆Ａとガイドラインを作成した。また市のＨＰにも掲載した。




アンケート　中学校保護者①と教職員②③

（３）持続可能な部活動等の地域移行の進め方【豊後高田市における運用】

〇運動部活動においては、競技力の補償、競技人口増加（普及）の両面を考慮する必要がある。複数校合同チームの編成も行うが、学校の統廃合とは切り離して考える。

〇文化部やスポーツ少年団も含めて地域移行を考える。

〇大分県立高田高等学校は一市一校であり、多くの地元生徒が進学しているので、小学校から高等学校までのスポーツ環境の構築を視野に入れて考える。

〇レクリエーション的な活動、シーズン制のような複数種目を経験できる機会の設定、支援を要する子どものスポーツ機会の保障も考える。

〇保護者の送迎や経済的負担が増えると、子どものスポーツ機会が失われることが考えられる。移住施策（子育て世代への手厚い支援）の功績は大きいが、経済的に厳しい家庭が多いのも事実である。保護者の負担軽減を意識した運用を考える。

〇大会参加においては、国や関係団体（中体連やスポーツ協会等）の動向を注視し、運用面の改善を図る。

〇部活動等の指導を教職員が希望する（兼職兼業）場合の手当支給を含めた制度を考える。

## ３　令和６年度の取り組みについて

（１）「地域クラブ」の設立に向けて

今年度より豊後高田市として初の中学生を対象とする「地域クラブ」の設立に向けて準備がスタートした。カヌー、空手道、ラグビーの３競技を候補に進めている。この３競技は市内に１校しかない高田高校で強化部活動とされ、小・中・高で連携して活動している競技である。さっそく４月より空手道とラグビーは部活動指導員を配属し、拠点校型部活動としてスタートをした。カヌーは小・中学生対象に既に地域総合型スポーツクラブが運営しているが、市外の部員も合わせて少数の活動となっている。中学３年生には学校の部活動を引退後、入部もできるようにしている。

今年度中、３競技での活動状況（適切な運営と管理体制、活動費、大会への参加等）の検証を行い、市の部活動地域移行化のモデルとなるよう期待している。現在は市教育委員会が運営母体となっているが、いずれは地域総合型スポーツクラブ「ぶんごたかだチャレンジクラブ」へと委託し、運営していく計画である。

（令和６年度の活動の様子）

カヌークラブ

今年度、インターハイの会場となった真玉Ｂ＆Ｇを練習の拠点として活動している。休日を含め、週４回の活動を行っている。

空手道部（拠点校）

今年度の県総体では、団体組み手で３位となり地元開催枠での九州大会出場を果たした。地域の道場での練習に励んでいる。

ラグビー部（拠点校）

部活動指導員を配置し、県内の色々な場所で活動をしている。大会等への参加など、積極的な活動を行っている。

（２）部活動地域移行総括コーディネーターの配置

地域クラブ活動がスタートしたことにより、市教育委員会では地域クラブ活動の窓口として、地域指導者、ぶんごたかだチャレンジクラブ、中学校と連携をしている。主な仕事として、

・部活動の地域移行の整備　・指導者との連携・連絡・相談　・中学校との連携・連絡・相談

・市民への啓発活動（ホームページの充実、リーフレットの作成）　・人材バンク設立（指導者の確保）

・部活動等検討委員会や市中体連評議員会への参加　・他市コーディネーターとの連携・相談・研修

などがある。本年度配置されたコーディネーターは教員とし現場で部活動に携わっていたこともあり、地域指導者、ぶんごたかだチャレンジクラブ、スポーツ協会、中体連等とのスムーズな連携が可能となっている。

（３）人材バンクの設置

令和８年度の運動部活動の土日完全地域移行を目指して、市教育委員会に「人材バンク」を設立した。指導者登録様式、指導者候補リストを作成し、部活動指導員や有資格者の確保・充実を目指す。中体連等と連携し、大会の引率や大会運営の補助、指導の在り方についての研修や講習会などを行う。スポーツ少年団や各種競技団体、スポーツ協会等と連携し人材を確保すること、また、募集方法の策定が、当面の課題である。

（４）拠点校型部活動の設置

今年度は空手道部やラグビー部が拠点校型部活動として活動を始めた。また運動部活動だけでなく、ブレイクダンス部や多くの文化部が拠点校型部活動として活動を始めた。令和８年度には全運動部活動が拠点校型部活動としての活動を目指している。拠点校型部活動が最終的なゴールではなく、全運動部活動が地域総合型スポーツクラブ「ぶんごたかだチャレンジクラブ」への委託を行い、１市１チームとして、小学校から高校までの一貫した活動ができる体制を整えたい。

## ４　今後の運用と課題

・財源の確保

今年度の空手道、ラグビー、カヌー部の活動を検証し、地域クラブの予算案を作成する。課題として、指導者の報償費等の検討、報酬等の財源、活動費等の財源の確保である。負担していくのが、市なのか保護者なのか、そしてどこまで保護者の経済的負担を減らせられるのかが課題である。

・指導者の確保

平日は教職員、休日は地域指導者が指導する体制を固めていく。教職員は地域指導者として休日の指導もできる。（兼職兼業）また、地域指導者は平日の指導も可能である。（部活動指導員や外部指導者）

課題として、学校教育への理解と専門性の確保、公認資格の有無などがあり、地方では高齢化や教員の異動などの問題から、人材確保が１番の課題となっている。

・拠点校型部活動

９月からの新チームが始動するタイミングで複数の部活動が拠点校型部活動へ移行しようとしている。部活動総括コーディネーターを含めた話し合いが行われているが、指導者の課題だけでなく、活動場所や活動時間の確保、送迎や移動手段など多くの課題がでているのが現状である。

# 教員が主体となって運営する地域クラブ活動について

富山県中学校体育連盟　研究担当委員長
富山市立興南中学校　　廣瀬　翔平

＜提案趣旨＞
令和５年度から、日本中学校体育連盟主催で開催されている「全国中学校体育大会」に地域クラブ活動（以下：地域クラブ）が出場することが認められ、富山県でも地域クラブが富山県中学校体育連盟（以下：県中体連）主催の大会に参加することが可能となった。大会に参加したチームには、学校部活動だけではなく、教員が運営している地域クラブも参加し、上位大会に進出している。そこで、今回の発表では、教員が中心となって設立した地域クラブの活動を取り上げ、今後の運動部活動と地域との連携の在り方をについて模索していきたいと考える。

## １　県内の地域クラブの現状

県中体連主催大会への参加について、令和６年度は９２の地域クラブを承認し、そのうち７２の地域クラブが大会に参加した。今回の発表では、教員が中心となって運営している地域クラブに焦点を当て、その取組を紹介する。

## ２　休日、平日ともに地域クラブ活動で行っている例（タカオカ・シティＳＣ）

(1)　「タカオカ・シティＳＣ」について

①　運営者の構成について

「タカオカ・シティＳＣ」は高岡市内の中学校に所属する生徒を対象とした、サッカークラブである。運営者は、代表者、指導者を含む６名で、うち５名は現在も市内の公立中学校に勤務する現職の教員で、もう１名は教員退職者で構成されている。タカオカ・シティＳＣの活動目的は以下の通りである。

【目的】
・サッカーを通じて会員の心身の健全な育成と相互の競技力向上。サッカーに関わるすべての人が心から楽しめる地域に根ざしたクラブとなることを目的とする。（タカオカ・シティＳＣ規約より）

②　地域クラブ設立の経緯について

現在、地域クラブとして活動しているタカオカ・シティＳＣは、少子化によって単独中学校で試合に出場できないことや、顧問の異動によって専門的な指導を受けることができないといった部活動のために、令和３年度に高岡市が各競技団体と連携して行った「中学生運動部活動選手育成支援教室」が始まりである。また、運動部活動の地域移行の推進により、現状の部活動では活動時間や頻度について満足な活動ができないという声を受けて発足された。その後、高岡市サッカー競技連盟が地域移行を図った事により、育成教室の指導者であった教員が地域クラブとして「タカオカ・シティＳＣ」を設立した。指導者がすべて教員で構成されているのはこれまでの経緯からである。

③　「タカオカ・シティＳＣ」の活動実績について

タカオカ・シティＳＣは令和４年度から地域クラブとして活動しており、以下は令和４年度からの活動についてである

| 年度 | これまでの活動実績 |
|---|---|
| Ｒ４ | 「タカオカ・シティＳＣ」設立。９月の新人戦が終了した後、高岡市内の中学校のサッカー部に所属する１、２生を対象として、練習試合等を行った。 |

| | |
|---|---|
| Ｒ５ | 中体連に所属するサッカー部やクラブユース参加チームとのオープン･トレーニングマッチを行った。 |
| Ｒ６ | 地域クラブ「タカオカ・シティＳＣ」として県中体連に加盟。県中体連、サッカー協会主催の大会やＪＦＡ高円宮杯等に参戦。 |

(2)　地域クラブの運営について

①　所属生徒について

タカオカ・シティＳＣに所属している生徒は、高岡市の中学校生が対象となっており、他郡市の中学校に通学する生徒の参加は認めておらず、あくまで「地域の生徒を対象」としている。生徒数については、令和６年度４月は１年生～３年生１１人、７月現在は２０名となっている。

②　活動時間について

・平日：火、木 17:30～19:00　・休日：土、日のどちらか　9:00～11:00

※休日の活動に関しては、各種練習や大会参加等により、活動時間は異なる。

③　活動費（会費）について

年会費：10,000 円　月会費：4,000 円

会費から、サッカー協会の登録料、各種保険、会場借上費、大会参加費、備品代、スタッフへの賃金を捻出している。なお、指導にあたるスタッフは現職の教員であることから、兼職兼業届を提出し報酬を得ている。また、指導者等に旅費が発生する場合の交通費等については高岡市サッカー協会の規定に基づいて支給される。

旅費規程（私有車使用）については以下を参照。

| 交通区分 | 支給規準 |
|---|---|
| 15km 以下 | 1km あたり３０円 |
| 15km 超、26km 以下 | 1km あたり３０円、但し、最大６００円 |
| 27km 超 | 1km あたり２５円、但し、最大８００円 |
| 県外への交通 | 1km あたり３０円 |

※県外遠征の祭には、有料高速道路代等も支給も同様に支払われる。

(3)　地域クラブ運営のメリット、デメリットについて

①　メリット

・指導に関して

学校生活を基本とした部活動指導を軸としていることから、学校生活に目を向けさせた指導を行っている。「勝利至上主義」ではなく、サッカーを通した、「人間形成」に重きを置いて指導している。特に、スタッフの所属する中学校生徒に関しては、学校生活の情報も得ることができ、様々な面で細やかなサポートを行うこともできる。

・施設管理について

練習場所は市内の中学校（高岡市立高陵中学校）を拠点としているため、夜間のグランドを使用する日程等について、施設管理者と連携が図りやすい。特に、休日や祝日は他の部活動やスポーツ団体の使用、学校行事等が行われることがあるため、施設使用に関して、日程に調整がしやすい。

②　デメリット

・勤務を終えてから指導に当たるため、スタッフ全員が揃うことが少ない。

・勤務学校から練習場まで遠い場合、到着まで時間がかかることがある。

・生徒指導上の事案が発生した際にも、練習時間に遅れてしまうことがある。

※今後は民間の指導者を増員することも視野に入れている。

## ３　平日は学校部活動、休日および夜間等は地域クラブで活動を行っている例
## （ターミガンズ富山ハンドボールクラブ）

(1)　「ターミガンズ富山ハンドボールクラブ」について

①　運営者の構成について

「ターミガンズ富山ハンドボールクラブ」は富山市内の３校区の中学校を対象とした男女のハンドボールチームである。運営者は、代表者、指導者を含む 11 名で構成されおり、代表者以外は、男女別にスタッフが指導に当たっている。その内、女子の監督は現職の教員である。

②　地域クラブ設立の経緯について

部員不足の解消、部活動の地域移行を目的として、令和５年４月に富山市内の呉羽、和合、西部校区を対象として「ターミガンズ富山ハンドボールクラブ」を設立。同年８月から地域クラブとして本格的に活動を開始した。ターミガンズ富山ハンドボールクラブは地域クラブでありながら、普段はそれぞれの学校のハンドボール部に所属し練習を行っている。地域クラブとしての活動は、平日の夜間や休日に合同で行っている。

※現在は、呉羽、和合校区の２校で活動を行い、西部校区は加入していない。

③　「ターミガンズ富山ハンドボールクラブ」の活動実績について

ターミガンズ富山ハンドボールクラブは令和５年度から地域クラブとして活動しており、以下は令和５年度からの活動についてである。

| 年度 | これまでの活動実績 |
|---|---|
| Ｒ５ | ８月からの活動を目指して、１年生は地域クラブ所属、２，３年生は所属中学校の部活動として地区大会等に参加。８月から地域クラブとして活動開始。次年度以降に中体連の大会に参加するため、９月に行われた富山市の新人大会には出場せず、地域クラブとして練習試合等の活動を行った。 |
| Ｒ６ | 地域クラブ「ターミガンズ富山ハンドボールクラブ」として県中体連に加盟。県中体連主催の大会に参加。全国中学校体育大会に出場した。 |

④　その他

ターミガンズ富山ハンドボールクラブでは、選手の練習量の確保、試合出場の機会を必ず与えるようにしている。クラブに所属する人数が多くなると、フォーメーションや試合を意識した練習等様々な練習が行えるメリットがあるが、反面、選手一人一人の練習量の確保が難しくなる場合がある。そのため、クラブでは練習量の確保として、チームを分けて練習を二部制にしたり、場所を分けて練習したりするなど工夫して、練習量の確保に繋げている。また、公式戦、練習試合を問わず、試合の出場機会を必ず与え、生徒が意欲的に取り組む環境づくりを目指している。また、他校の生徒と交流することで新たな人間関係を築くこともできる。

(2)　地域クラブの運営について

①　所属生徒について

ターミガンズ富山ハンドボールクラブに所属している生徒は、前述した３校区を対象とした中学校生が参加している。令和６年度に加入している生徒数は男子３０名、女子２０名である。

②　活動時間について

・平日：中学校の体育館で週に１～２回　19:00～21:00

・休日：土、日のどちらか　9:00～12:00

※休日の活動に関しては、各種練習や大会参加等により時間は異なる。

③　活動費（会費）について

年会費：5,000 円　　月会費：3,000 円

会費から、ハンドボール協会の登録料、各種保険、会場借上費、大会参加費、備品代、スタッフへの交通費・賃金を捻出している。なお、現職の教員については、報酬は受け取らず指導にあたっている。今後は、年会費、月会費を増額するなどして、スタッフへの賃金を増額することも考えている。

(3)　地域クラブ運営のメリット、デメリットについて

①　メリット

・指導に関して

普段は、中学校の部活動に所属して活動しているため、学校部活動を基本とした指導を行っている。これは学校生活を疎かにせず、学習や基本的生活習慣を確立させ、ハンドボールの技術向上に生かすためである。指導者は、普段から挨拶や相手を敬うことを生徒に伝え、「誰からも応援されるチーム」を目指して指導にあたっている。

・施設管理について（メリット）

前述したタカオカ・シティＳＣと同様に、練習場所は市内の中学校を拠点としているため、休日や夜間に体育館を使用する時間や曜日等について、施設管理者と連携を図りやすい等、指導者が教員であることから、比較的練習場所の確保がしやすい。

・休日は教員が部活動指導を行うことがない

休日は地域クラブとして活動を行うため、顧問が指導を行わない。そのため、休みを取ることが容易である。但し、土日に行われる大会には役員として参加している。

・県外遠征を行う際は、部活動ではなく地域クラブとして遠征を行う

遠征の際は保護者が行うため、バスを借り上げる必要がない。バスの借り上げ代は年々高騰しているが、高額なバス代を捻出する必要がなくなった。

②　デメリット

・現在は、指導者である教員の勤務校（自校体育館）を夜間や休日の練習場として使用しているため、練習場所の確保が容易であるが、指導者の異動した学校によっては練習場所の確保が難しくなる可能性がある。

## 4　今後の課題

今回紹介した地域クラブの運営は、教員が地域クラブを設立する際のモデルとなるであろう。今後は、地域クラブに教員がスタッフとして関わることも増えていくことが予想される。しかし、現状ではスタッフに十分な賃金が支払われていないことや現職の教員ならではの問題もあり、まだまだ善意で成り立っていることも事実である。これからは、スタッフに充分な賃金が支払われる仕組みを考えていくことも課題になるであろう。

昨今、部活動に関してネガティブな意見を耳にすることが多くなった。しかし、その中でも熱意をもって部活動指導をする教員によって中体連が支えられている。特に、ハンドボール競技は令和９年度から、全国中学校体育大会がなくなり、ハンドボール部がなくなる学校や競技人口の減少が懸念されるが、ターミガンズのように新たな活動の場を確保し、前を向いて活動を開始している地域クラブもある。また、富山県では３月に春の全国中学生ハンドボール大会が行われている。中体連競技からなくなる種目だからこそ、富山県の取組がハンドボール競技の在り方を模索する新たなモデルケースとなっていくことを願っている。

これからもスポーツを始めたいと思う中学生の活躍の場をなくさないために、中体連と各競技団体等が連携を図り、よりよい活動を模索していきたい。